島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第23巻－第２号　29頁～34頁　平成元年12月

青年期危機に関する臨床心理学的考察

―― 二人の少女の事例から ――

大　西　俊　江*

Toshie ONISHI

A Study of Clinical Psychological Approach to Puberal Crisis

―― On two girl's cases ――

Ⅰ．はじめに

子どもから大人への移行期にある青年期は，従来から不安と動揺に満ちた「疾風怒涛」の，危機的時期であると言われている。

Kretschmer, E.（1948）は，青年期精神医学に初めて「思春期危機」という概念を導入した。Kretschmer は「思春期危機というのは，疾病でも神経症でもなく，むしろ思春期と密接な関係をもつ限局された体質的な時間的経過であり，かなり強い社会的な影響を伴う人格的成熟の困難である。」と述べており，思春期という年代それ自体が危機的であると指摘している。

精神分析家である Erikson, E. H.（1968）は，青年期の最大の課題として「自我同一性」の概念を提唱した。青年期において自我同一性は確立されていくが，その時に同一性間の葛藤や同一性の拡散に巻き込まれて動揺し，さらに否定的同一性や過剰同一化が介入して同一性の危機に陥ることもあるとしている。

清水他（1976）は，「青春期危機」に関する文献的考察を行い，また「青春期危機に関する試論」（清水　1976）として，青年が危機に追い込まれる条件を取り挙げている。それは，(1)若者に特有の思い上がり，(2)内省の乏しさ，あるいは外に向けられていた眼差しを内に方向転換できないこと，(3)連帯感を経験できていないこと，(4)あれかこれかの選択を迫られる二者択一の状況，すなわち「決断」の課題に直面することが青年を危機的状況へ追い込む条件であると述べている。

＊ 島根大学教育学部教育心理研究室

一方で，この思春期危機概念に対する反論もある（清水他　1976，1979，井上　1982，下坂　1984，）。アメリカの Offer, D. らの研究は，一般の健康とされている青年に対する調査を基にして，いわゆる「青年期平穏説」を提起し，「青年の混乱は決して普遍的な現象ではなく，あくまでも青年期を通過するいくつかのルートのひとつに過ぎない。」と結論づけている（村瀬　1984）。村瀬（1976）は，この Offer, D. らの研究，彼と同時期に行われた Masterson, J. F. らの症状的青年研究，Marcia, J. E. の青年の identity の客観的研究などを展望し，自らの研究結果と照らして，「危機説」と「平穏説」について総合的考察を行っている。それによると，青年期の危機の程度を規定する諸要因は，「不安，葛藤，挫折をもたらし易い内面的状況的な負の要因群とこれに対応しこれを克服する方向に作用する正の要因群の二つに大別できる」とし，「青年期が危機的であるかないかという問題の提示は，少なくとも青年を理解する上で適切とは言いがたい。どのような青年と状況がどのような危機を招きやすいか問われるべき課題である。」と述べている。

筆者は，児童期までは順調に成長してきた少女が，青年期の入口で挫折し，以来本人はもとより家族までも危機的混乱に陥ってしまった二つの事例に対して，母親面接を通して関わってきた。本稿では，これらの事例を通して，青年期の危機的状況を具体的に理解し，青年期をめぐる問題について若干の考察をする。

Ⅱ．事　　例

A子（中学３年）　３人同胞の末子。兄，姉ともに有

名国立大学在学中。会社員の父と専業主婦である母と兄妹3人の5人家族だが，A子中3時より兄と姉は下宿している。A子は幼児期から小学校中学年まではとても明朗で活発であり，思いやりのある子どもであった。何事もこつこつと丁寧に創りあげていくタイプで，両親は兄妹の中で最も才能を伸ばしていく子ではないかと思っていた。小学校の頃は，姉と競ってるところもあり，ピアノなどいつも姉より上手に弾き，自信を持っているようだったが，だんだん姉を尊敬するようになった。兄とはとても気が合っている。父は仕事熱心で多忙で帰宅が遅いことが多いが，A子は嫌ってはいない。問題が生じるまでは，母との関係も良好であり，家庭の雰囲気は和やかであった。遅く帰宅した父が食事をしていると，兄妹が食卓に集まって来て，お茶を飲んで歓談するのが習慣だった。つまづきの発端は，小学校5年の時，男性の担任教師との間でのトラブルから始まった。その担任教師は，とても感情的な人だったらしい。学年全体を全校で一番の学年にしようということに熱心な学年主任に煽られてか，担任はクラス全体の成績をあげることにとても熱心だった。できない子には班の責任でできるようにしてやりなさいとA子にその任を負わせた。放課後担任が教室にやって来ないので遅くまで勉強を見てあげていたら，自分で判断して適当に切り上げたらいいと言うし，また別の日そのようにすると怠けていると後から叱るといった風で，A子のすることが気にいらず，ことごとにとりあげて注意したり指摘したりした。A子はだんだんそれまでの元気がなくなっていった。A子は母親の勧めと姉の出身校でもあるということで，校区外の中学校へ進学した。その中学校は学校全体のレベルが高く，自由な雰囲気があると母親は評価しており，実際に姉はその中学校に適応し，気に入っていた。A子は初め入学を拒んでいたがそのうち同意した。中学校へ入学して2カ月ぐらいは元気で，楽しく通学していたが，やがて厳しく細かい校則に反発して校則違反を繰り返すようになった。何度もきまりを破り，ネクタイをしない，名札をつけない，制服の裏にワッペンを縫いつける，鞄をぺたんこに潰して持っていく，自転車通学で決められているヘルメットを着用しないなど教師の目に触れるような違反を繰り返しては厳しく注意され，6～7人もの教師の居並ぶところへ親まで呼び出されて詰問された。成績も入学当初は上位だったのが，だんだん下がっていった。2年になった頃からは朝食も食べず，夜も気が向けば家族と一緒に食事をすることもあるが，自室で一人で食べたり，家族のいないとき台所にいってこっそり食べたりするようになった。無気力で茫然としていることが多く，登校の仕度をしてもなかなか動き出さず，鏡の前に座ってじっとしていて出かけようとしない。学校を休んで一日公園でカセットテープを聴いていたり，授業中友人と学校を脱け出したり，帰宅時間が遅いことが多くなった。また，弁当は持って出かけるが，食べずに自室のごみ箱に捨ててあったりする。母親が参観授業に行くと，最後部の隅の席で深く俯いて，殆ど授業に参加している様子ではなく，教師も放っているという状態だった。

B子（小学5年）　一人っ子。父は自営業。母は専業主婦。父の仕事の関係で小学校4年の時に転校。おとなしく，きちょうめん。5年になって担任が替わり，それまで中学校の英語の教師をしていた若い独身の女教師が担任となった。B子は2学期頃より担任に盾突くようになった。B子は幼い頃からピアノを習っていて，地方大会に県代表で出演する程の腕前だったが，担任は音楽の時間にピアノをでたらめに弾くので，B子が指摘したら睨まれるようになった。担任が言ったりしたりすることが不誠実に思え，また担任の方もB子を煙たがるようになって，二人の間はますます険悪になっていった。B子が反抗的な態度をとるので転校してほしいと担任は家庭訪問をして泣きながら訴えたので，両親は初めてB子の問題を知った。母親が学校へ出かけて行って転校の話は納得できない旨校長に話し，校長も了承した。しかし，担任はその後B子に対しいっさい無視する態度を取り始め，B子の反抗も増長していった。学校に行っても教科書もノートも出さない，テストも白紙で出す，授業中ふらっと室外に出るなどしても担任は放ったままだった。そのうち非行グループに誘われてマーケットで万引きしたのが発覚し，学校から連絡があり両親が呼び出された。B子は家では母親に反抗し，一言もしゃべらないかどなり散らすので母親の手に負えなくなり，某相談機関を訪れた。B子も3回程通ったが，「私はどこも悪くない。」と言って通所をやめてしまった。母親もしばらく通所していたが，本人が通わないのに自分だけ行っても仕方がないと思って止めた。その後もB子は荒れ続け，そのうち登校を拒否するようになった。母親は何とか宥めて登校させようとしたが応じず，まるでうつ病のように塞ぎこんでしまうようになった。入院させようと両親で話し合ったがB子は承知しなかった。そこで今度は両親の方で転校を考えるようになり，転校先を苦慮し，結局父親の実家のある山村の学校に転校を決め，本人もやっと納得して，祖父母（二人暮らし）に世話をしてもらうことにし，母親が週に一度会いに行くことにした。5年生の3月初めに転校し，登校するようになった。その学校は

表1　事例の概要

	A　子（14才）	B　子（12才）
家族構成	父 母 兄 姉	父 母
生育史上の特記事項	幼稚園時転居 手のかからない，育てやすい子	幼稚園登園を渋る。幼稚園，小4時転居転校。 なんとなく遠慮していて，甘えない子。
性格	明朗，活発，思いやりがある，几帳面，丁寧，正義感がある。	おとなしくまじめ，几帳面，完全主義。
学業成績	上	上
特技・趣味	ピアノ　読書	ピアノ　絵画　読書
身体発育	普通　初潮　小5	痩せている
問題発生時とそのきっかけ	小5　担任教師とのトラブル	小5　担任教師とのトラブル
問題行動	校則違反　教師への反抗　母親への反抗（口をきかない，どなる，弁当を捨てる。）	教師への反抗，家庭内暴力（特に母親）
母親面接開始時期間	中3　5月　1年間（21回）	小5　3月　1年4月（26回）
母親の印象	知性的　やさしい　丁寧な物腰	知性的　上品　神経質　本来は快活　社交的
夫婦関係	円満　夫を尊敬している	夫に不満

小規模校で1クラス20人足らずで，担任の若い男性教師は，B子につかず離れずの暖かい態度で接してくれたので，B子の心は徐々になごんで，やっと学校生活に参加するようになった。しかし，母親に対しては極めて拒否的，反抗的である。

以上二つの事例は，匿名性を保持するために細部については改変してある。また，子どもや青年は治療機関や相談機関を訪れることに極度の抵抗を示すことが多いが，この少女たちも頑なに来談を拒んだので，上記の内容は母親面接から得たものであり，母親面接開始当初の状況である。母親面接はA子もB子もほぼ1年間にわたって継続し，A子は高校入学，B子は中学入学を機に一応終結した。事例の概要を表1にまとめた。

III．事例の検討

二つの事例から青年期前期における危機的状況と特徴および問題を(1)青年期心性（権威への反抗と友人関係），(2)母娘関係，(3)学校における問題，に焦点をあてて考察する。

(1)　青年期心性（権威への反抗と友人関係）

Buhler, C.（1967）は，男子で14歳～16歳，女子で13歳～15歳の青年期前期を拒否の時期，第二自己主張の時期としている。この時期は今日では，栄養的，文化・社会的影響により当時より1～2歳若くなっていると考えられるから，ちょうど小学校高学年から中学生時代に相当

する。この年頃の子どもたちは，一面では大変理屈っぽく，また他の面ではきわめて非論理的であって，自己主張が通らないと癇癪を起こしたり，すねたりして，精神的に不安定な時期である。特に親や教師など権威に対して反発する第二反抗期と言われる時期である。この第二反抗期は，自我の形成，自立ときわめて関係が深く，青年期にある人たちは，身近にいて彼等の行動を統制したり，拘束したりしようとする親や教師，大人あるいは社会に対して反発することを通して親から独立し自我を形成していく。青年期の反抗は，個人によりまた周囲の人間関係によって現れ方に著しい差があり，親がそれと気づかずに，しかもうまく親との距離が保て自立していく者もいれば，反抗の限りをつくし，本人自身も家族も混乱の渦中から脱出できなくなって，専門家の力を借りなければならない場合もある。二つの事例は後者である。

A子もB子も小学校5年の時，担任教師とのトラブルがきっかけとなってさまざまの問題を惹起した。

彼女たちの共通点は表1からもわかるように，感受性が鋭く，想像性，創造性に恵まれ，芸術面での才能も人並みはずれて優れていた。母親は知的で教育熱心，経済的にも豊かで親ならずともこれだけの知性，感性が磨かれればどんなに素晴らしい人に成長することかと期待できるほどの優れた資質の持ち主であった。二人の大きな相違点は，性格的な面にあると思われる。A子は活発で友達も多く，教師に反発してもそれを支えてくれる友人がいた。家族と口を聞かなくなっても仲間関係は良好であった。B子の方は，おとなしく消極的で，わかっていても発言しないとか自分の方から友達の中にはいっていくことができず，教師とうまくいかなくなってから，担任が友達をB子の監視役にしていたことがわかり，友達に対して不信感を抱き，クラスで孤立していった。またB子は，ひとりっ子であり，家庭でも孤独感を強く抱いていたようである。

Sullivanは，ことに青年期前期において同性同年輩の友人を得ることが，その後の人間らしい生き方にとってきわめて重要であり，この時期の親友関係の形成が疎外されるとのちに重大な精神障害の起こる危険があると指摘している(阪本　1973)。精神障害に至らないまでも，長じて対人関係に困難が生じることは予想される。

A子は元来友人も多く，教師から非難，叱責されても陰で庇ってくれる仲間がいたが，受験が目前に迫ってくるにつれて，仲の良かった友人はA子から離れていき，学習に興味を失った仲間同志の集まりとなってしまった。A子自身その友人たちには満たされるものが少なかったようで，だんだんひきこもって家で過ごす時間が多くなっていった。B子は，小学校3年までは仲の良い友達がいたが，転校してからはなかなか友達ができなかった。

この時期の友人関係の繋がりの脆さ，希薄さと，高学歴志向の今日，子どもたちの生活は多忙になっていて，ゆったりとした深いつきあいができにくい物理的，心理的状況が友人形成に大きな影響を及ぼしている。このような意味においても，現代はますます青年にとって，自らの課題を達成しにくい状況となってきていると言えよう。

(2) 母娘関係

事例における母娘関係の問題について，面接経過と併せて考えてみる。

子どもの反抗に対して，親や教師は同じ立場に立って規則や枠で一層拘束を強めコントロールしようとする。

A子の親もB子の親もともに娘の行動が社会規範から逸脱しないように宥めたり，すかしたり，励ましたりしてきた。母親面接を始めて，母親は子どもに受容的に接するように心がけ，子どもの気持ちを理解するよう態度を変えていった。これまで10数年続けてきた養育方針や養育態度を百八十度転換することは並み大抵のことではなく，母親の思いの中には，本当に子どもの行動を見守っているだけで反抗が治まり，安定してくるだろうかという不安は強かった。しかし，母親は親の論理で子どもを動かすことが今や不可能であることを体験的に気づいていった。A子は，学校では相変わらず反抗的で教師からは睨まれ，ますます居場所がないという感じを抱いたようで，その後心気的訴えが強まり登校を渋るようになったが，家庭ではゆったりした気分で母親と一緒に料理を作ったり，音楽を聞いたりして寛ぐようになった。B子は，転校してからは教師に直接反抗することはなくなったが，なかなかクラスに溶け込めず，学校でのストレスを家庭で発散させているかのように，母親に悪口雑言を吐き暴れた。母親が子どもの気持ちをできるだけ受容し，非指示的に接するようになると，B子は攻撃の鉾先を失い，退行していった。B子母子の関係は，幼児期から何となく噛み合わず，甘えてくるという感じが母親には感じられなかったというが，まるで甘え直しをしているかのように，母の背中に馬乗りになって風船つきに興じたり，高い高いをしてくれとせがんだりするようになった。こんな経験は母子ともに初めてのことで「母親でいて，こんなに楽しいと思ったことはない。」と語られた。

牛島（1988）は，最近の思春期症例において十中八九は母子分離の問題であって，従来，青年が大人社会への

第一歩を踏み出す思春期からの出口の問題であったのに対して，幼児的親子関係から思春期にはいる入り口の問題に変わってきていると述べている。更にこのような変化の基盤には，親子関係の質的変化があり，思春期病理の変遷に相応した家族構造の変化があると述べている。

思春期の入り口に立った青年は，自我機能の発達と身体的成熟によって自立へ向かい，これまでの親子関係が維持できなくなる。依存と自立，甘えと反抗といった感情の両極性，感情の両価性，非合理性などは，青年心性の特徴である。このような子どもの状況に呼応して，母親がほどよく対応できないと適切な分離は困難となる。

二人の少女の母娘関係で気にかかることは，幼児期「手のかからない，良い子」であったということである。幼児期における密接な，安定した母子関係の成立が，その後の精神発達にとって重要であることは諸家が指摘しているところである。短絡的であってはならないが，二組の母子の早期の関係と彼女たちの危機的状況における混乱とは関連があるのではないかと考える。早期母子関係は精神病理学的には母親の遡及的報告によって知ることが殆どである。しかし，危機的状況に陥ってもどうにかそこから脱出していく青年と長期にわたって混乱状態が続き，自我同一性を確立できない青年とでは，早期の母子関係の安定性と，さらには子どもの精神発達に応じた母親役割の遂行が為されているかどうかに差異があると言えないだろうか。

(3) 学校における問題

詳細な面接経過は本稿では省略するが，A子もB子も母親の変化に応じて，家庭を徐々に「安心できる居場所」として受けとめるようになっていった。二人の母親はいずれも初めは，子どもがこういう状態になったのは，学校（教師）の責任が大きいとして，何とか善処してもらえないかと訴えてきた。しかし，一個人で学校の体制を動かすのにはあまりにも微力であることを知り，「子どもを救うのは親しかいない」と自覚せざるを得なくなった。たとえ家庭の状況が改善されたとしても，子どもたちの生活の大半は学校であるから，一度つまずいた子どもを立ち直らせるのに，学校の果たす役割は極めて大きい。

学校現場の問題は各方面から指摘されているが，多くの学校は，近年ますます子どもたちが，生々と学習し，学校生活を楽しむ場ではなくなってきている。

幸いB子は転校先の担任が大変暖かい人で，B子に付かず離れずの姿勢で対応し，母親の心配をしっかり受けとめるだけの度量のある教師だったので，マンモス校では体験できないような地域と密着した学校行事にも参加し，小学校を卒業することができた。これと対照的にA子の場合は，学校の管理体制はますます強化され，「前科者」のレッテルが貼られ，疑いの眼で監視され，さらに受験という外的圧力も強まって，頭痛，発熱，腹痛といった心身症状もあらわれて登校できない日が増加し，やっとのことで卒業までこぎつけた。

A子とB子がいわゆる「思春期危機」の状態に落ち込んだのは，本人自身の要因（素質，体質，性格など），家庭的要因（親子関係，家族関係など）のほかに社会的要因ことに学校の要因（教師，校則，学校の雰囲気，友達関係，その他）が大きくかかわっていると考えられる。教育現場におけるさまざまの問題（校内暴力，非行，いじめ，学業不振，不登校をはじめとする情緒障害，その他）を解決するためには，教育制度の改革，教師の質的向上のみならず，精神医学や臨床心理学の専門家およびスクール・カウンセラーの養成が急務であると考える。

Ⅳ. おわりに

ここに提示した二つの事例は，未だ青年期の真っ只中にあり，今後いかにして親から分離し，独立していくのか，そして彼女たちが「真の自分とは何か」という「自我同一性」をいかにして獲得していくのか多くの課題が残されている。

青年期は，今日の社会的，文化的状況の変化によって遷延される傾向にある。笠原（1976）は精神病理学の観点から，30歳前後に青年期特有の病態の変化が見られるとし，長引いた治療もこの時期によくなるか軽症化するという一つの節があるということから，青年期から成人への移行点は30才前後にあると考えた方がよいと述べている。

青年期危機を身体，心理，社会の各側面から全体的に把握する必要があると思われるが，そのためには，長期にわたる縦断的研究および予後研究がなされなければならない。

参考文献

1) Buhler, C.（1967）Das Seelenleben des Jungendlichen.（原田茂訳　1969「青年の精神生活」協同出版）
2) Erikson, E. H.（1968）Identity－Youth and Crisis.（岩瀬庸理訳　1973「アイデンティティ」金沢文庫）
3) 井上洋一（1982）青年期危機（馬場謙一編「青年期の精神療法」金剛出版）

4) 笠原　嘉（1976）今日の青年期精神病理像（笠原嘉他編「青年の精神病理」弘文堂）
5) Kretschmer, E.（1949）Psychotherapeutische Studien.（新海安彦訳　1958「精神療法」岩崎書店）
6) 村瀬孝雄（1976）青年期危機をめぐる実証的考察（笠原嘉　他編「青年の精神病理」弘文堂）
7) 村瀬孝雄（1984）青年期危機説への反証（島園安雄他編「精神科MOOK　思春期の危機」金原出版）
8) 坂本健二　他（1973）サリバン（「精神病理学３」異常心理学講座９）
9) 清水将之（1976）精神病理学からみた青年の危機（笠原嘉　他編「青年の精神病理」弘文堂）
10) 清水将之・頼藤和寛（1976）青年期危機について（その１）－文献展望と予備的考察－・精神医学，18，２，145－152
11) 清水将之（1979）青年期精神医学の問題（現代精神医学大系　７Ｂ　中山書店）
12) 下坂幸三（1984）序説（島園安雄　他編「精神科MOOK　思春期の危機」金原出版）
13) 辻悟・頼藤和寛（1979）青春期心理（現代精神医学大系　７Ｂ　中山書店）
14) 牛島定信（1988）思春期の病理は変わったか（「思春期の対象関係論」金剛出版）